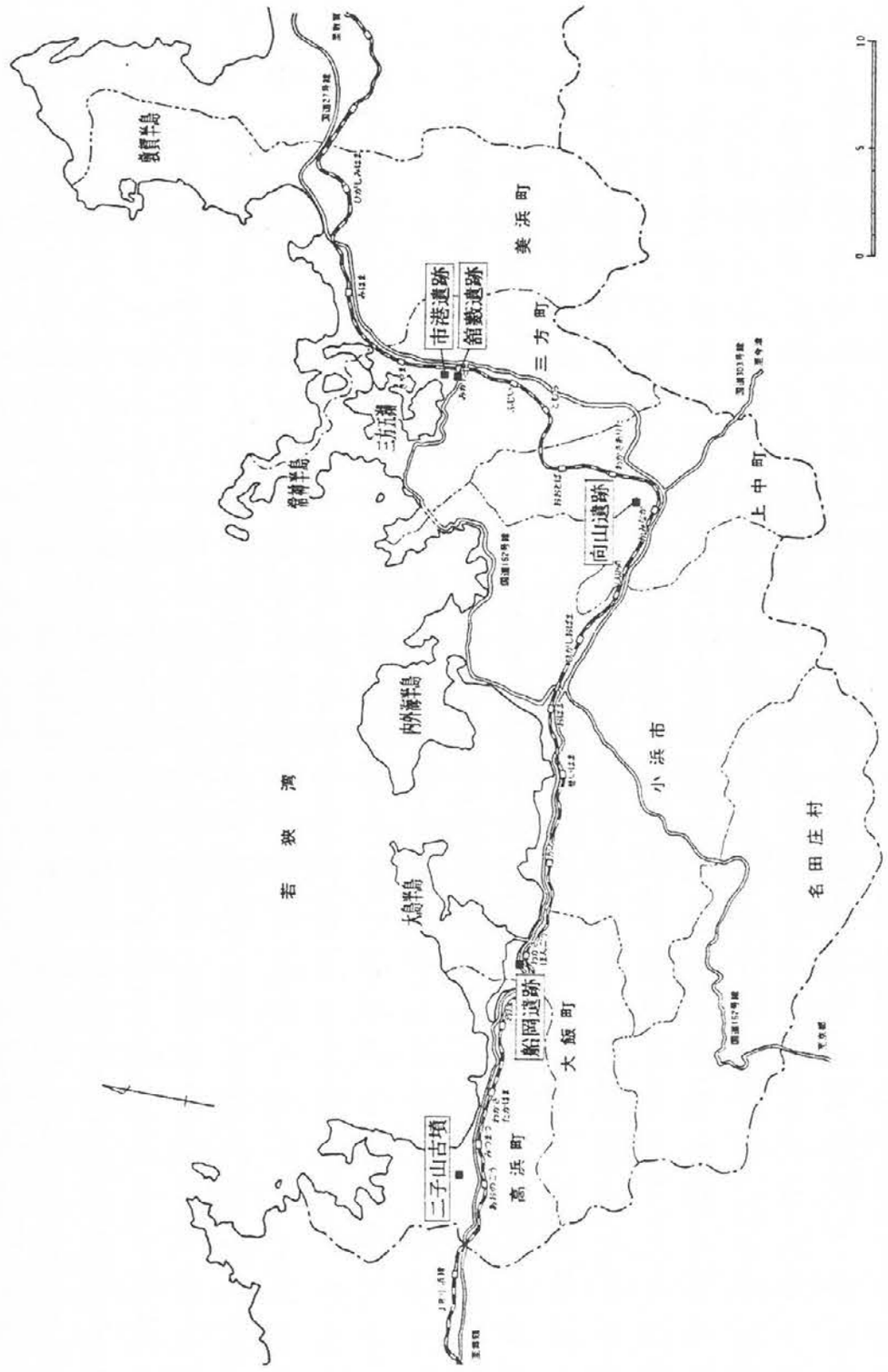
平成元年度 第11回郷土史講座資料

平成元年度

若狭地域における発掘調査の成果

平成２年２月25日(日)

福井県立若狭歴史民俗資料館



発表遺跡位置図

市港遺跡

所在地	三方町三方１７号深川、２８号市港、２９号三反田ほか
調査原因	県営圃場整備事業
調査期間	平成元年１１月６日～１２月２０日
調査主体	三方町教育委員会
調査担当者	三方町立郷土資料館　　田辺常博
調査面積	２５０m²
時代	縄文時代早期、中期末～後期前半 古墳時代後期～飛鳥時代、平安時代

調査の概要

市港遺跡は、山古川、観音川などにより形成された扇状地面の海抜３．０～６．５mの水田に拡がっており全体的に花崗岩質の砂やレキが厚く推積している。

調査は、圃場整備での水路予定個所に２３個のトレンチを設定しすすめた。

この結果、遺跡南側の２８号市港、２９号三反田付近では、砂質土に縄文土器（中期末から後期前半の土器が主体で磨滅した破片が多い）が部分的に包含されている。

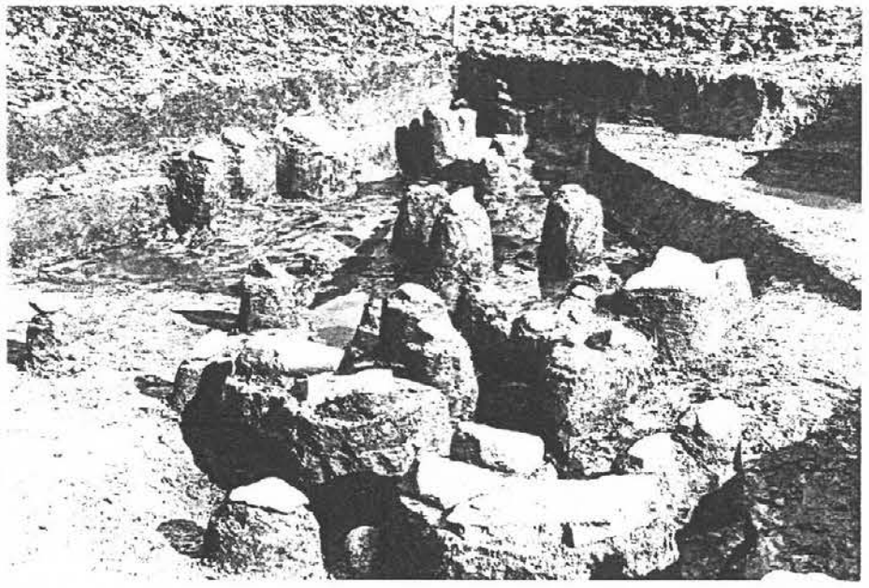
ＱＲ２７トレンチでは、有機物をやや含む砂層から縄文時代早期の高山寺式併行の外面に楕円押型文、内面に斜行沈線を施した深鉢の大型破片が出土している。Ｙ２１、２２トレンチでは、水田耕土面すぐ下に平安時代の溝状の落ちこみが検出され、溝内より須恵器の杯などが出土している。

遺跡北側の１７号深川付近では、Ｏ４６、Ｏ４７、ＯＰ４８トレンチで、水田耕土面を含む約７０cmの砂質土下より、古墳時代後期から飛鳥時代（６世紀～７世紀中ごろ）の土師器、須恵器などの遺物を多量に包含する炭混黒褐色土の層が検出された。出土した土器類の中には、祭祀に使われたと思われる小型丸底壺、手捏土器、また浜禰ⅡＢ式の製塩土器もみられる。

特に、海岸部の遺跡でない市港遺跡から製塩土器が出土することは興味深く、三方町では田名遺跡（浜禰ⅡＡ式を主体とする）に次いで２例目である。また、この遺物包含層下の砂質土からは、円形や楕円形の穴が検出されており、当時の基盤面とするならば、柱穴とも考えられる。

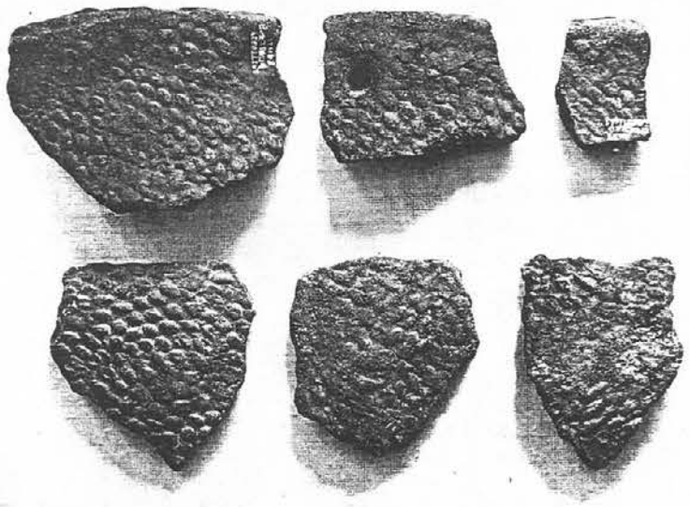
以上、縄文時代早期から平安時代にわたる遺物包含層及び遺構面を検出することができ、いくらか鯖川流域平野の東側に位置する三方湖畔の遺跡の状況をつかめることができた。

なお、この範囲確認調査結果にもとずきＯ４６、Ｏ４７、ＯＰ４８トレンチ付近の古墳時代後期から飛鳥時代の遺物包含層及びＹ２１、２２トレンチ付近の平安時代の溝遺構については、この４月から本調査を行なう。



平安時代の溝状遺構

古墳時代後期の土師器・手捏土器出土状況



縄文時代早期の押型文土器

舎官（たち）藪（やぶ）遺跡

所　在　地	三方町鳥浜２４号舘藪、２５号山川北ほか
調査原因	住宅団地『ぶるーはいつ館川』造成
調査期間	第１次調査〔範囲確認〕：平成元年７月１日～７月15日
	第２次調査〔本調査〕　：　〃　７月31日～10月９日
調査主体	三方町教育委員会
調査担当者	三方町立郷土資料館　　田辺常博
調査面積	第１次調査：　１９０m²
	第２次調査：１０００m²
時　　代	１５世紀後半から１６世紀初頭～近世

調査の概要

舘藪遺跡は、小浜線三方駅西側に位置し、山古川などにより形成された扇状地の海抜６．０～７．５ｍの水田及び畑に拡がっている。

この付近は、地元では殿様の屋敷があったという伝承地で字名も『舘藪』として残り、遺跡北側には『城縄手』という字名も残っている。また『若狭郡懸志』には、所在地不明ではあるが、熊谷大膳亮直之の屋敷が三方村にあったと記されている。

このことから、発掘は調査区域のほぼ中央に土塁状に細長く残る畑〔東西４０ｍ，南北１２ｍ〕から調査をすすめた。この土塁は、周囲の水田との比高差が、１．５ｍありここより、板塀などの施設があったと考えられ、礎石の一部を検出することができた。また、土塁南下の水田からは堀をともなう石積遺構が検出された。

〔土塁部の調査〕

・１次調査で検出された礎石２〔３０×３０cm〕，礎石３〔３０×４５cm〕を中心として面的に調査をすすめた。２次調査では、礎石２の西2．0mに礎石１などが検出されたが、良好な配列としては検出されなかった。

しかし、２０～５０cm大のレキがほぼ一面にわたりみられた。これらのレキ

は、自然堆積とも考えられるが、一部土塁の中軸から南側では、やや規則制をもった集石がみられ、板塀などの施設があったことも想定される。

・出土遺物

越前焼大甕、土鍋〔越前焼Ⅳ期、１５世紀後半から１６世紀初頭、室町中期から後期初頭〕　青磁、白磁〔１６世紀代〕

〔石積遺構などの調査〕

・１次調査で検出されている石積およびこれに平行する溝を検出すべく面を削っていたところ、調査区域のほぼ全体にわたり２０cm大の花崗岩のレキが敷石されたように検出された。このため、遺構の時期差判断に困難をきわめた。

石積は、東西方向にのび約２１ｍ検出することができた。この石積は、犬走りの幅が１．０～１．５ｍあり、堀側の法長は西から東へと短かくなっており、ｃ17では法長１．２ｍ、石積天端から堀底までの深さが約６０cm確認できた。

石積南側の溝は、一部石組もみられ、溝幅が１．０～１．８ｍと西から東へと幅が狭まり、約２１ｍ検出された。ｃ17では、溝幅が１．７ｍ，深さが約３５cmある。なお、ｃ17からｄ17付近の溝には土師質の灯明皿が投棄されており溝内から多く出土している。

石積北側から土塁までが堀と考えられるが、幅が１０ｍ近くあったと想定される。しかし、この堀部は、トレンチでの層位確認のみの調査であった。層位の状況は、砂層、砂質土が自然に堆積しており人為的な形跡がみられなかった。また、堀底などからの出土遺物もみられなかった。

石積遺構の南側には、東西方向にのびる幅が約５０cmの石組が約２５ｍにわたり検出された。なお、この石組を除去したところ、この下より板材、自然木などが全面にわたり敷設されていた。構造から、排水施設とも考えられる。

・出土遺物

土師質灯明皿〔溝内、１５世紀後半から１６世紀初頭〕

越前焼大甕〔石積遺構上面、　　〃　　〕ほか

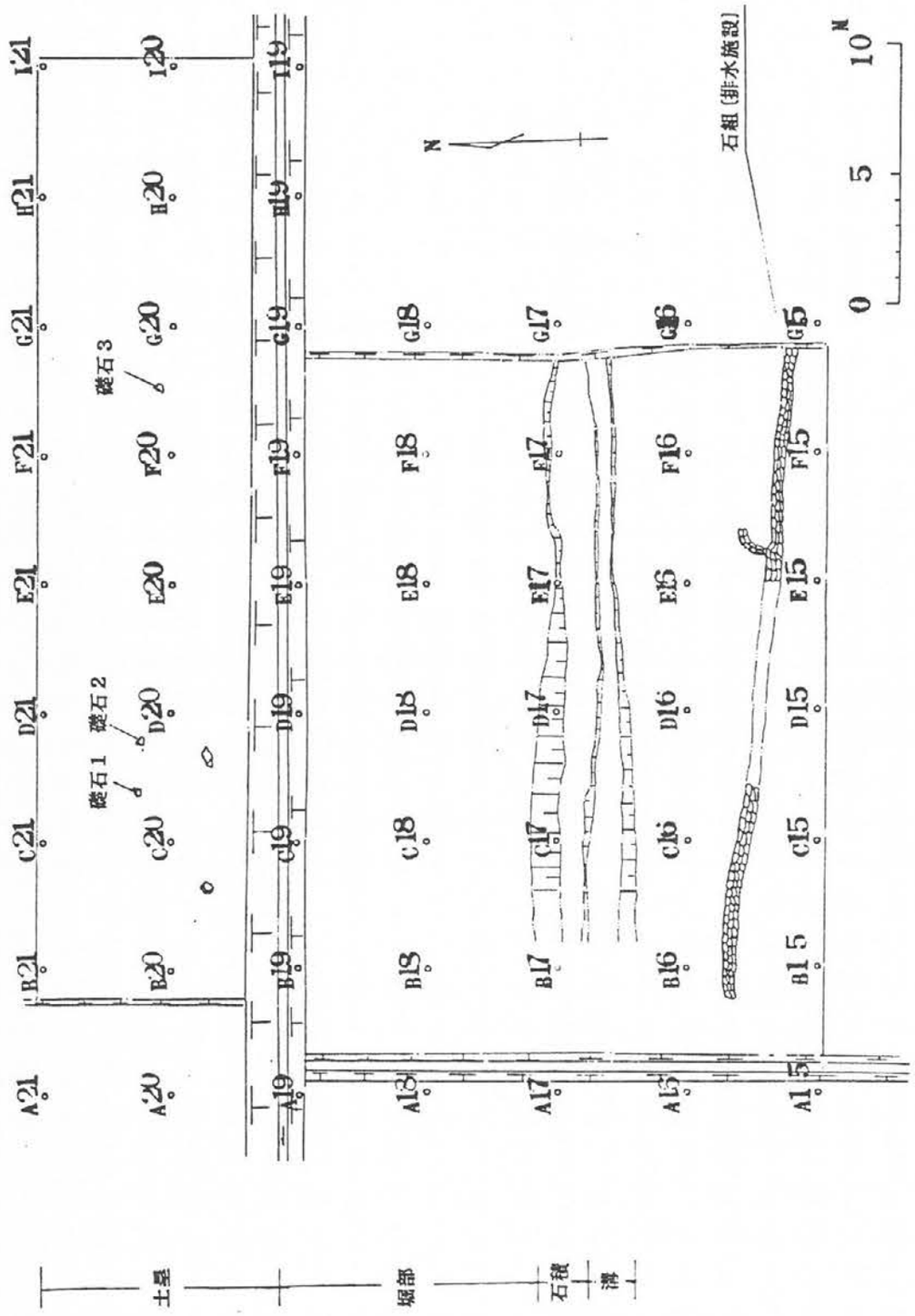
※遺構の時期関係

①土塁の礎石、堀、石積遺構、溝〔１５世紀後半から１６世紀初頭〕

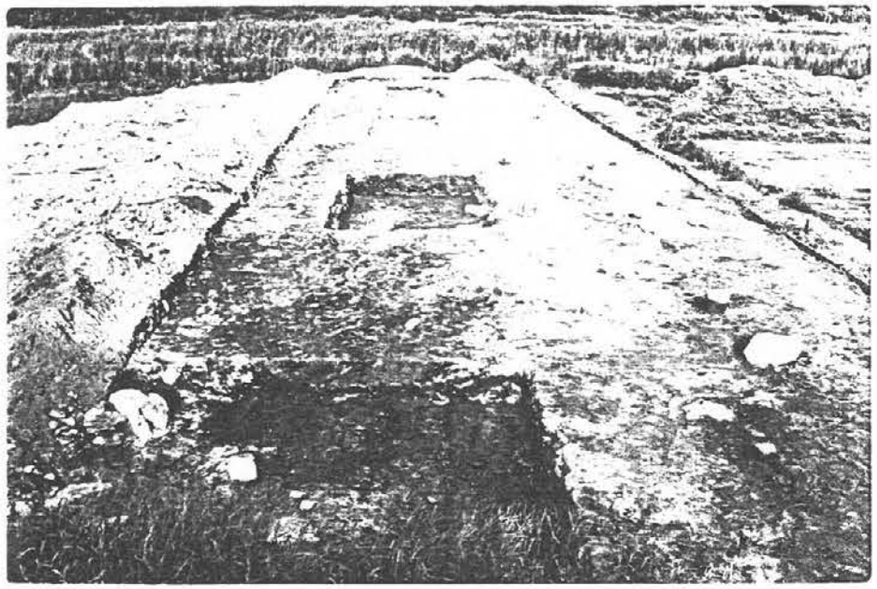
②自然堆積による堀部の消滅〔１６世紀代〕

③石組の排水施設〔近世〕

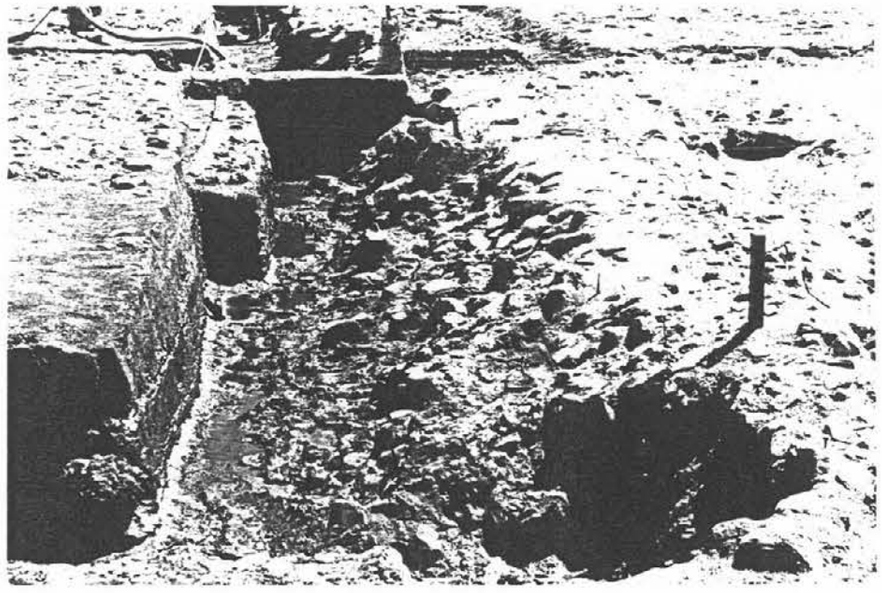
④水田基盤面の敷石〔近世〕



館敷遺跡第２次調査設定・遺構配置図



土塁検出状況



石積検出状況

向山遺跡

所在地：福井県遠敷郡上中町堤地係
調査原因：若狭中核工業団地造成に伴う土取り工事により消滅
調査期間：昭和63年10月1日～平成元年3月30日
調査面積：3,500㎡
調査主体：福井県教育委員会
調査担当：若狭歴史民俗資料館

［調査の概要］

弥生時代後期～古墳時代前期の墓壙群とそれを削平もしくは盛土して造成した中世末期（？）の山城（砦）を検出した。

A．弥生時代後期～古墳時代前期

［遺構］

一部を溝で区画した不整楕円形の台状墓（約20×10m）の中央や縁辺に、岩盤を掘りこんだ８基の土壙墓（墓穴）を検出した。

a）長方形土壙　（平均的法量4.0×1.3×0.5m）　６基
　台状墓中央に４基（ＳＫ01～04）　うち３基は重複
　〃　縁辺に２基（ＳＫ06、07）

b）幅広の長方形土壙（4.0×2.0×1.0m）　２基
　台状墓を区画する溝に重複

［遺物］

墓の上に供えられた品物
　土器（弥生土器、土師器）　約400片
　鉄製品（鉄剣と思われる）　３個体以上
　　うち１点はほぼ完形（52×4.0cm）

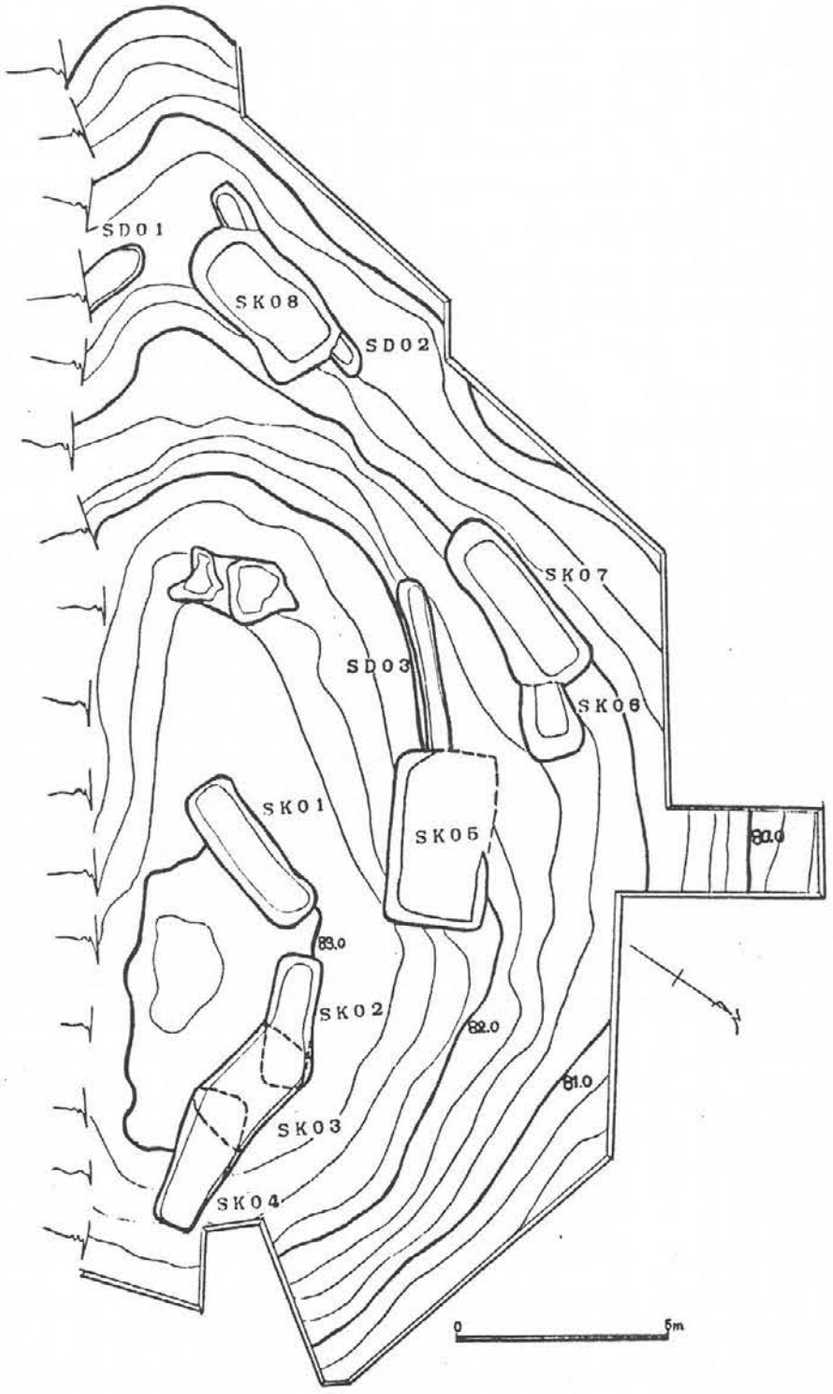
弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、共同体内部で台頭してきた権力者層の家族が葬られた墓。

若狭地方では初めての発見。

B．中世末の山城（砦）

［遺構］

山頂より北西と南西とにのびる尾根上に郭（平場）を造成。
　北西尾根：４段の半円形の小さな郭（平坦面）
　南西尾根：先端部の半円形の郭に石囲いの炉跡（のろし用か）



向山遺跡尾根頂部遺構配置

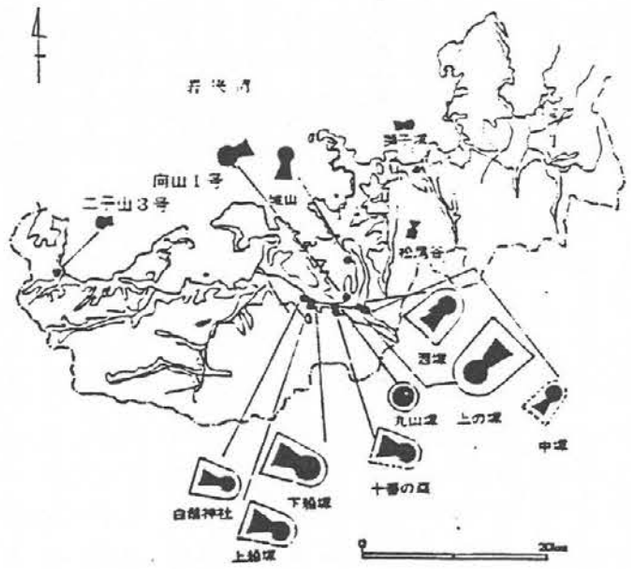
二子山３号墳

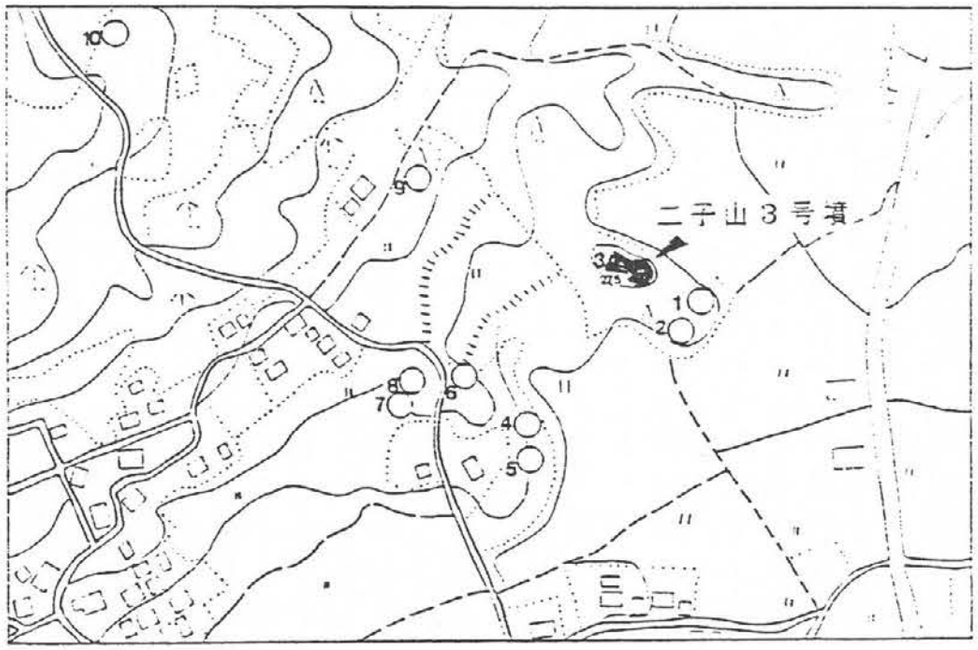
所 在 地：福井県大飯郡高浜町小和田
調査原因：将来の開発行為に備えるための遺跡確認と古墳の保存・活用を図るための方法の模索。
調査目的：第２次調査　埋葬施設の調査
調査期間：第２次調査　平成元年 7月20日～ 9月20日
調査面積：第２次調査　６０㎡
調査主体：高浜町教育委員会
調査担当：若狭歴史民俗資料館

［第１次調査―墳丘調査の成果］

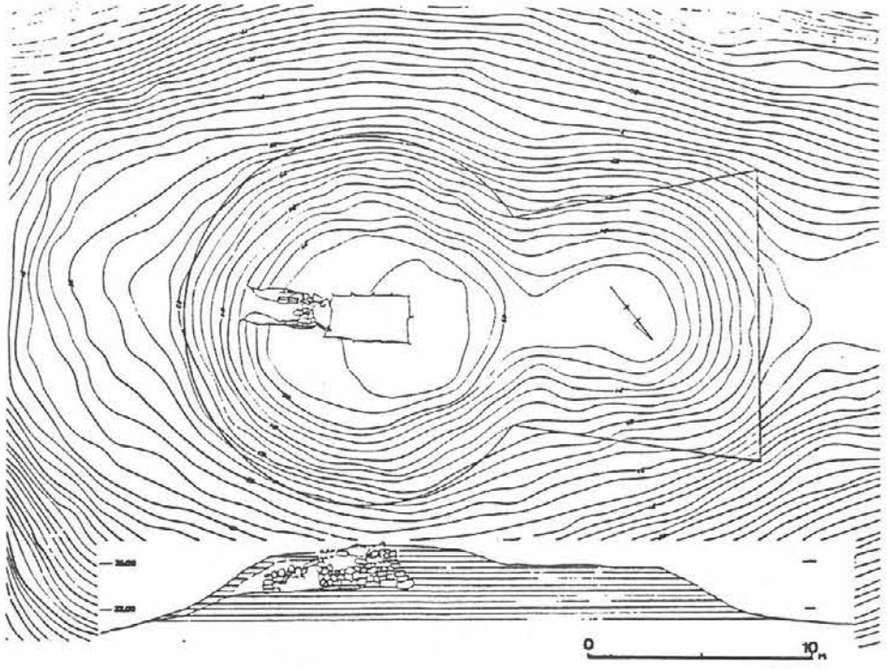
立地：青葉山の東麓丘陵より派生した支尾根の先端部。古墳時代後期の円墳が群集する小和田古墳群中の１基。隣接する支尾根の先端部には石剣・石戈が発見された小和田遺跡（弥生時代中期）がある。

墳丘：前方後円墳　全長26m　後円部径16.8m
地山削り出し　上部盛土　　葺石なし　埴輪なし
墳丘くびれ部で５世紀末や６世紀後半の土器（須恵器）が出土。
横穴式石室の羨道部を確認。





古墳周辺の地形と古墳の位置



墳形と横穴式石室の位置

［第２次調査―埋葬施設の調査成果］

A．横穴式石室　　河原石積み

玄室［遺骸を納める部屋］長3.7m　幅2.0m　推定高1.7m

羨道［玄室に横から入る通路］長4.4m（うち壁が石積みである部分の長さ2.5m）　幅0.8m　　天井石を架けない

南東方向に開口（後円部うしろの平坦面に向かう）

検出状況：玄室の天井石と側壁上部の石が石室内に倒壊。奥壁は完存。入口を塞ぐ割石積みの閉塞石はほぼ完存。

盗掘された形跡なし。

築造年代：６世紀初め（副葬品の須恵器の年代）

６世紀中葉まで埋葬に使われる［追葬］

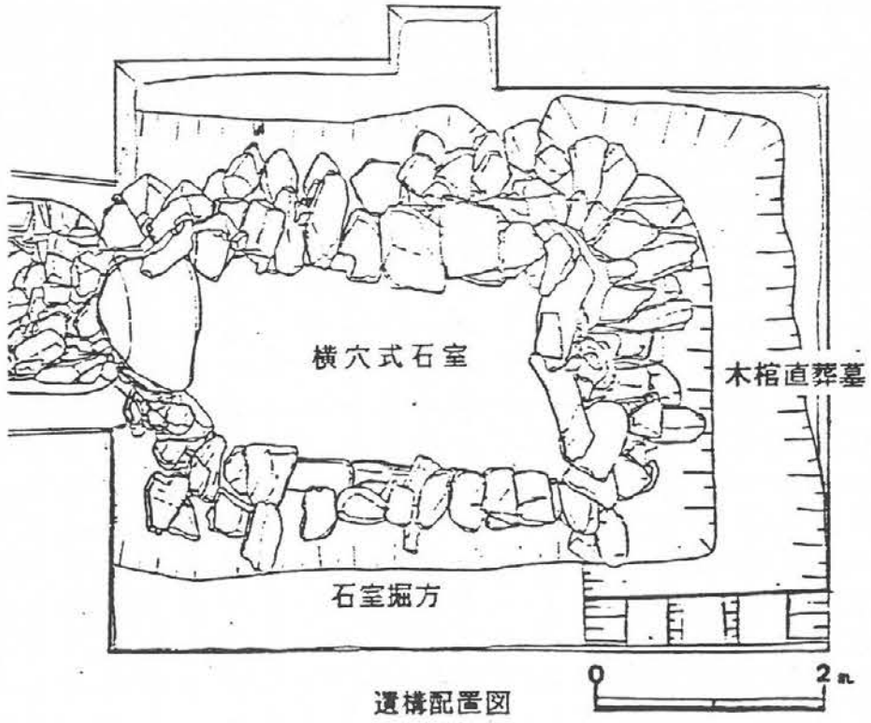
古墳墳頂での祭祀は６世紀後半まで続く。

B．木棺直葬墓［墓穴のなかに直接木棺を納めて埋めてしまう墓］

盛土なし　　長方形の墓穴（約５×２m）　墓穴上面で土師器３片

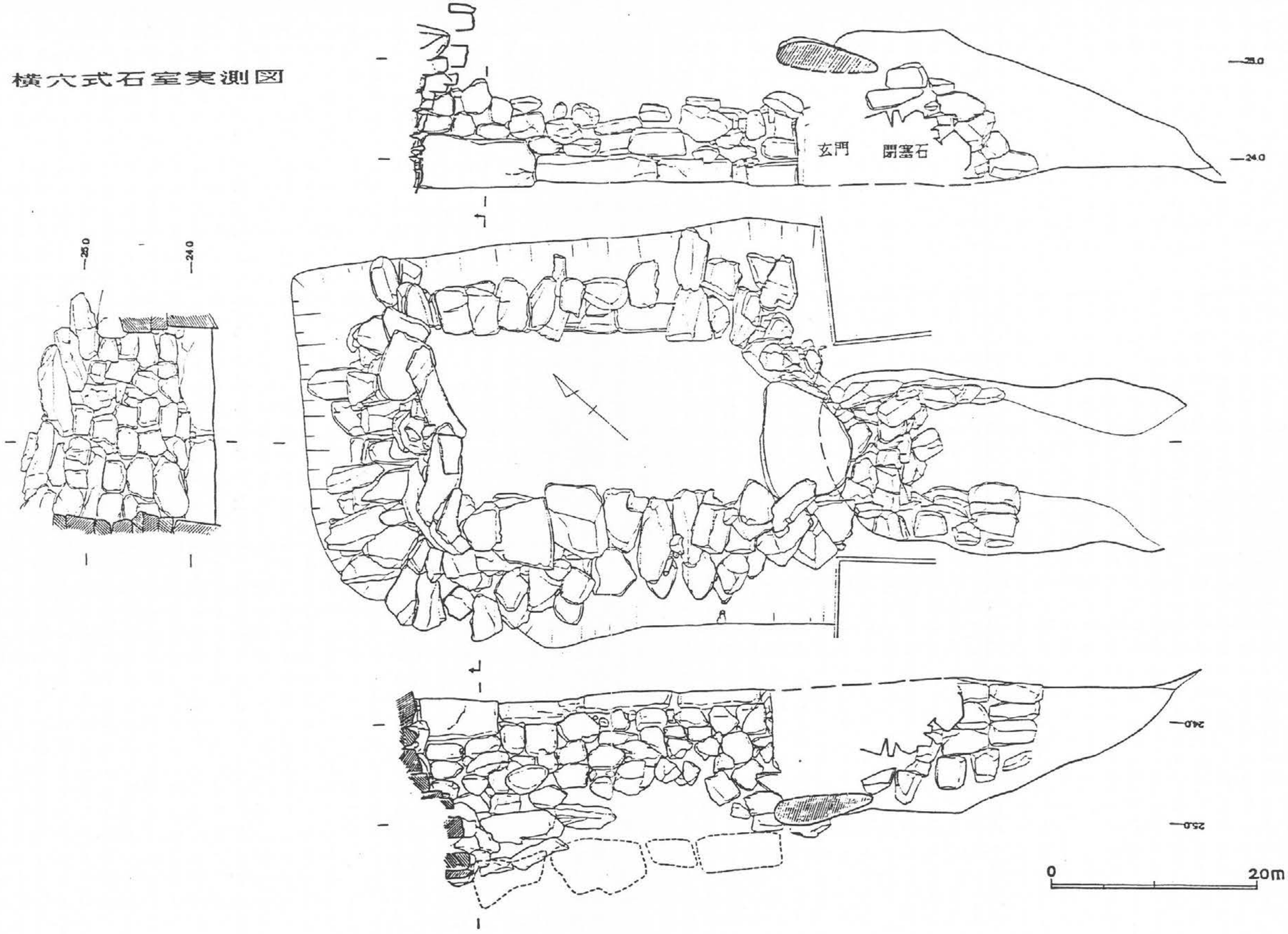
割竹形木棺［丸太を縦に半截して内部をくり、一方を棺身、他方を棺蓋としたもの］　　副葬品なし

時期：古墳時代中期か？　　石室築造時に切り込まれており、二子山３号墳より古い。



遺構配置図

横穴式石室実測図



［横穴式石室］

位置：後円部墳丘の中段　　開口方向：南東（S41°E）葬送儀礼の場と思われる後円部後方の平坦地に向かって開口する。

構築方法

1）羽子板形に地山を掘りこむ。羽根をつく部分が玄室、取手が羨道。

2）据付け穴を掘って直方体状の大きな石を横置きし、玄室壁体の基底を造る（腰石）。掘方と腰石の間に人頭大の石を１、２段入れる（裏込め）。腰石内側にも間隔をおいて石を沿わせ、土で被覆する。

3）河原石を４段小口積みし、さらに方形板状の石を２段積む。

4）上記３の作業に並行して玄室袖部と羨道の石積みを行う。左袖は２個の直方体状の石を縦置きし、右袖は河原石を小口積みする。羨道は玄室寄り半分程度に河原石を平積みする。袖石は突出しない。

5）袖部に楣石を架け、この楣石から奥壁にかけて天井石をのせる。羨道には天井を架けない。　　玄室床面に玉砂利を敷く。

閉塞方法

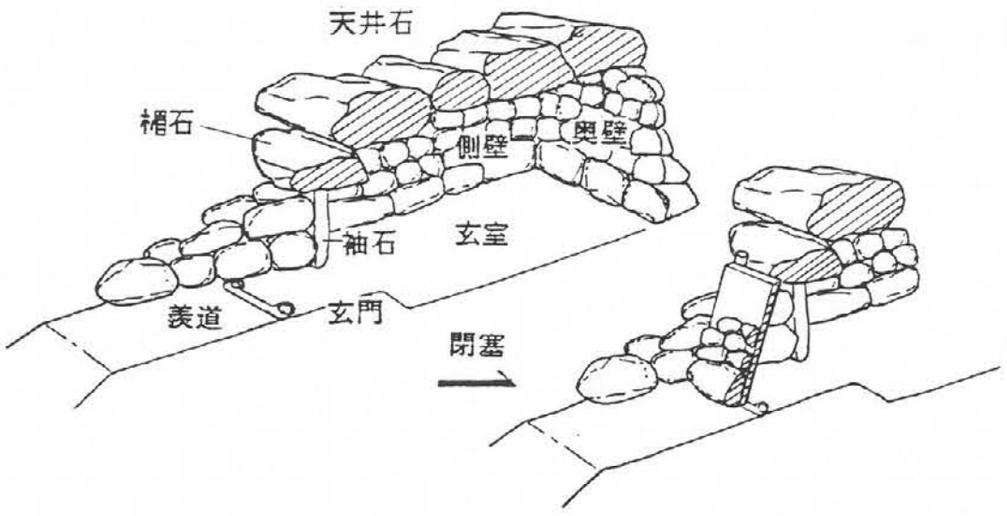
1）楣石のやや外の羨道床面に溝を掘り、溝の両端内側に穴をあける。

2）穴に２本の木を差し込んで楣石にわたし、これに木板を立てかけて溝で受ける。（残っていた溝と穴とから推論）

3）板のすぐ外側に、羨道幅に近い大きな石を置き、この上に板に沿って割石を一重で積み上げる。

4）羨道を土で埋め戻す。

5）追葬時には必要なだけ羨道の埋土と閉塞石上部の割石を除去して板をはずし、終了後は逆の作業で埋め戻す。



二子山３号墳横穴式石室模式図

［副葬品の出土状況と埋葬］

副葬品［遺骸とともに墓の中に納められたもの］

死者が生前愛用していた、あるいは大切にしていた品物。土器のように中に食べ物などを入れてお供えした物。刀子のように死者を悪霊から守るためのおまじないの道具。死後の世界に必要と考えられた物。

副葬品の配置状況

＜横穴式石室の特質――追葬＞さきに埋葬された人の副葬品が邪魔になるときはこれを隅に片付ける。　　副葬品の移動・混乱。

A．元の位置を保っていると思われるもの

装飾品：頭部の位置がわかる。

刀・刀子：遺体に並行する。鋒は主に足の方を向く。

土器の一部：C群とB２群。鹿飾付瑞。

B．玉砂利敷の床面の状況――遺体があったと思われる場所が長方形状にわずかに沈下。

A、Bから少なくとも４体の埋葬が奥から順に行われた。遺体の方向は石室に直交。中で組み合わせる木棺を使用。

C．土器（須恵器・土師器）と遺体の対応

第１遺体――C群　　第２遺体――A群・（B１群の一部？）

第３遺体――B１群　　第４遺体――B２群・鹿飾付瑞

二子山３号墳出土遺物リスト

石室内副葬品

(1)　土器類

須恵器：杯身12，杯蓋16，瑞4，短頸壺3，短頸壺蓋3，有蓋高杯1，無蓋高杯1，台杯短頸壺3，台付短頸壺蓋3，広口壺1，台付有蓋壺1，台付有蓋壺蓋1　長胴壺1，小型壺1，提瓶2

土師器：壺6，

(2)　鉄製品　　(3)　装身具

馬具：轡1，辻金具2，絞具2　　勾玉2，管玉5，ガラス小玉48点以上，耳環1

武器：刀3，矛1，鉄鏃約20

農工具：鎌1，刀子5，斧1，

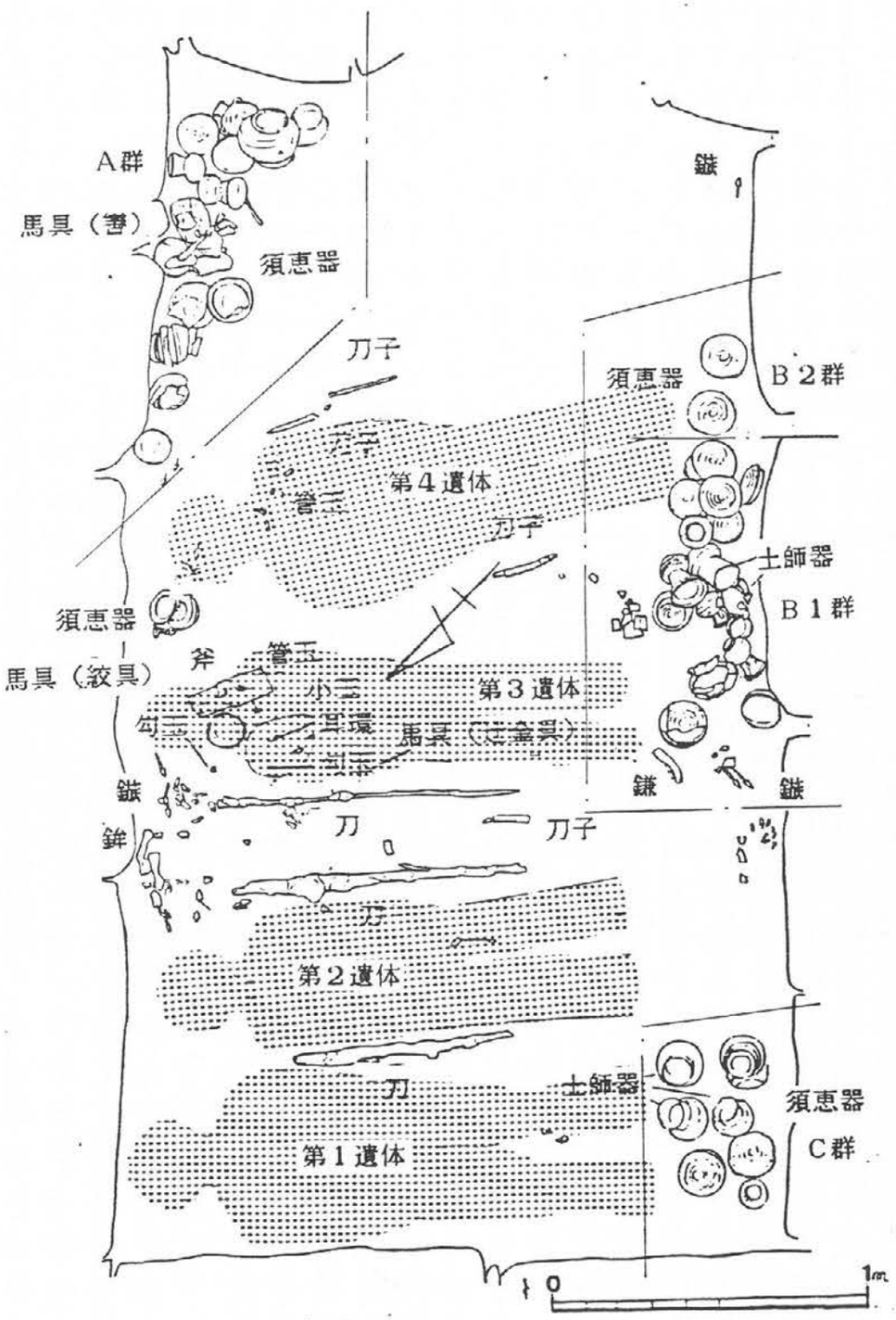
墳頂部封土内

(1)　土器類

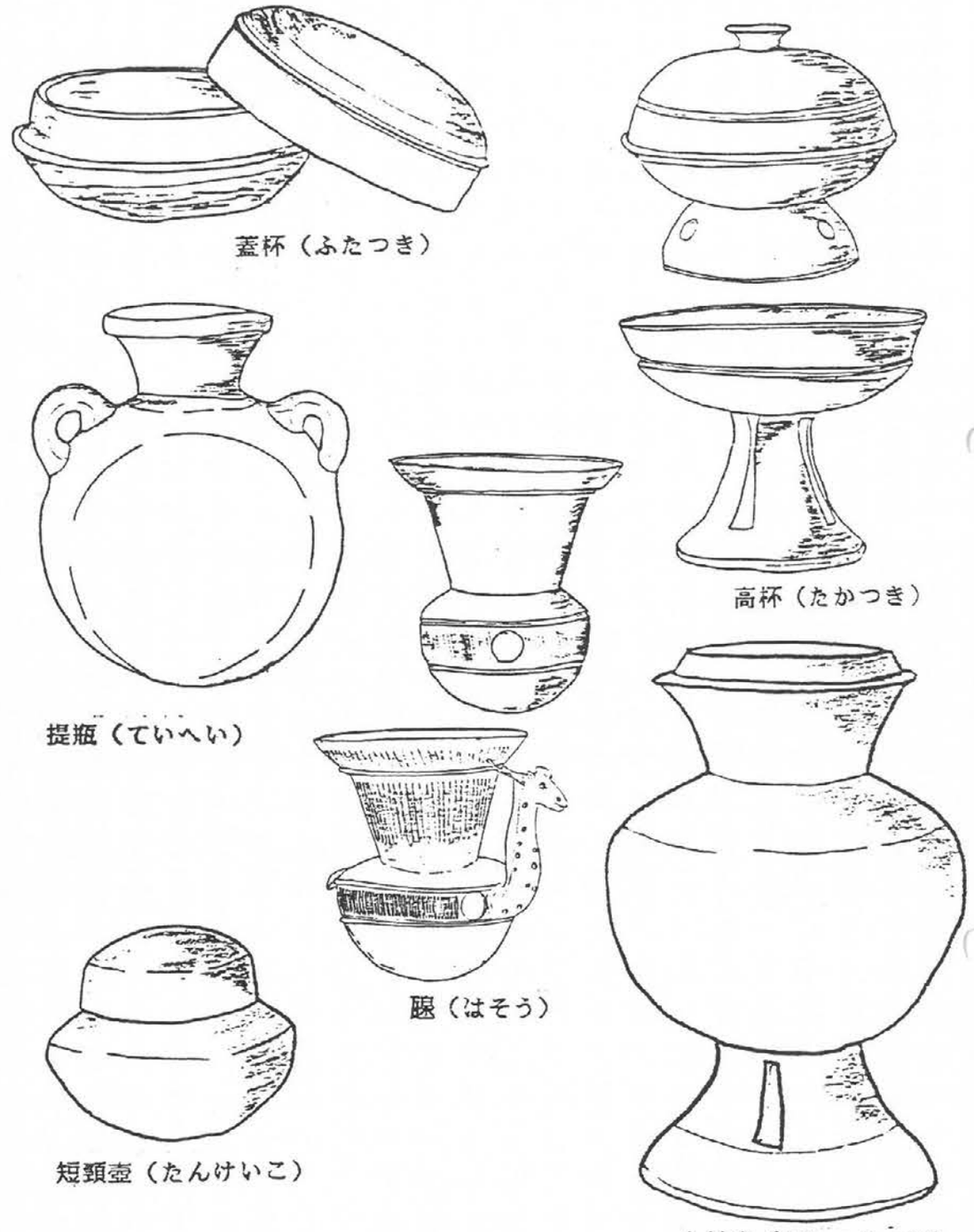
須恵器：杯蓋，杯身，甕破片多数，短頸壺2，器台1

土師器：甕破片多数，

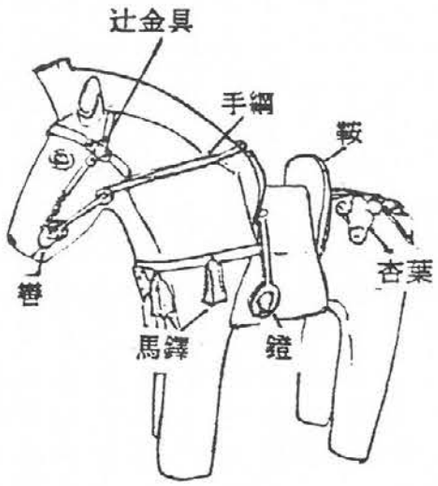
(2)　紡錘車（石製）



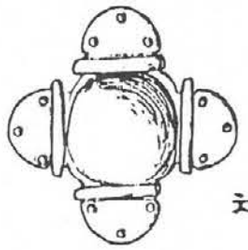
副葬品の出土状況



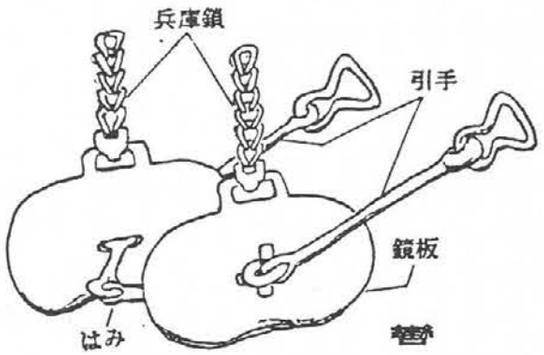
須恵器

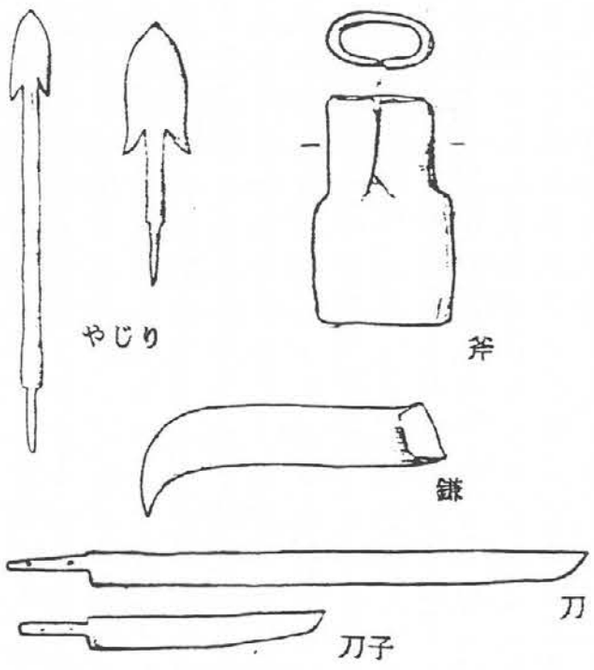


馬具

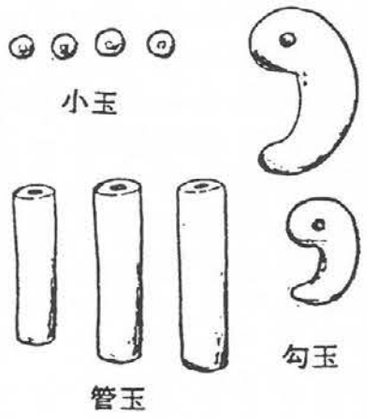


辻金具



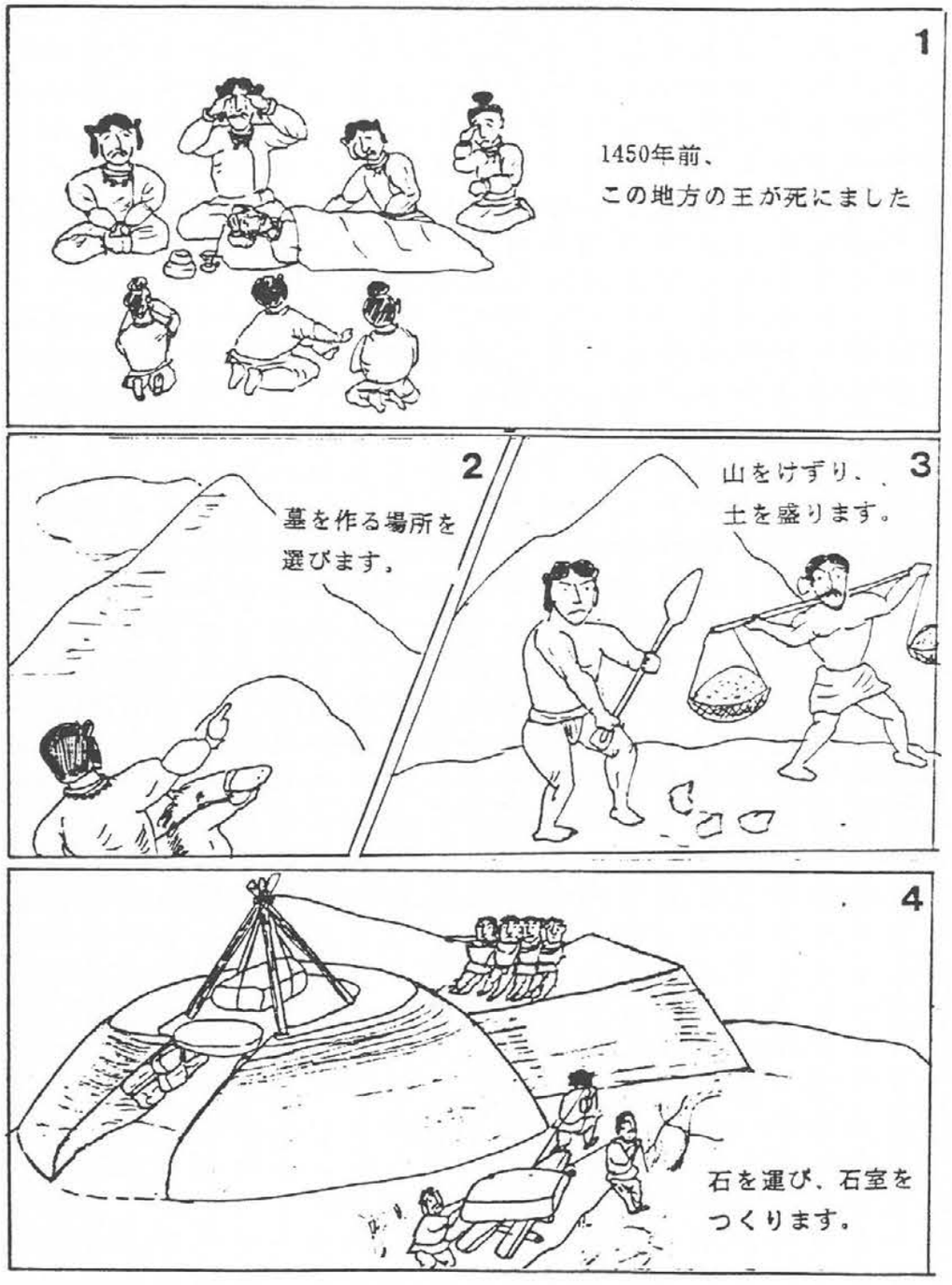


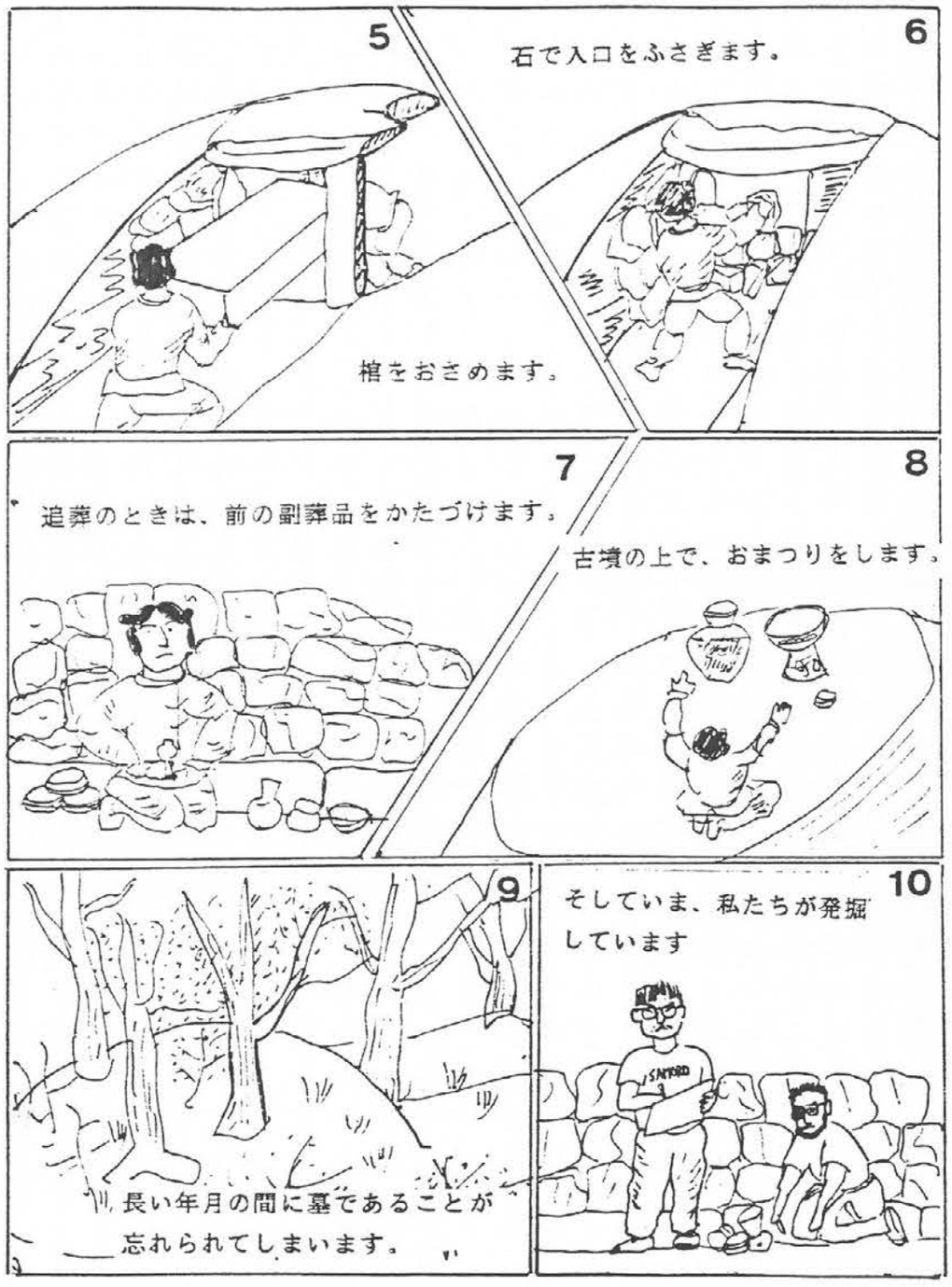
鉄製品



装身具

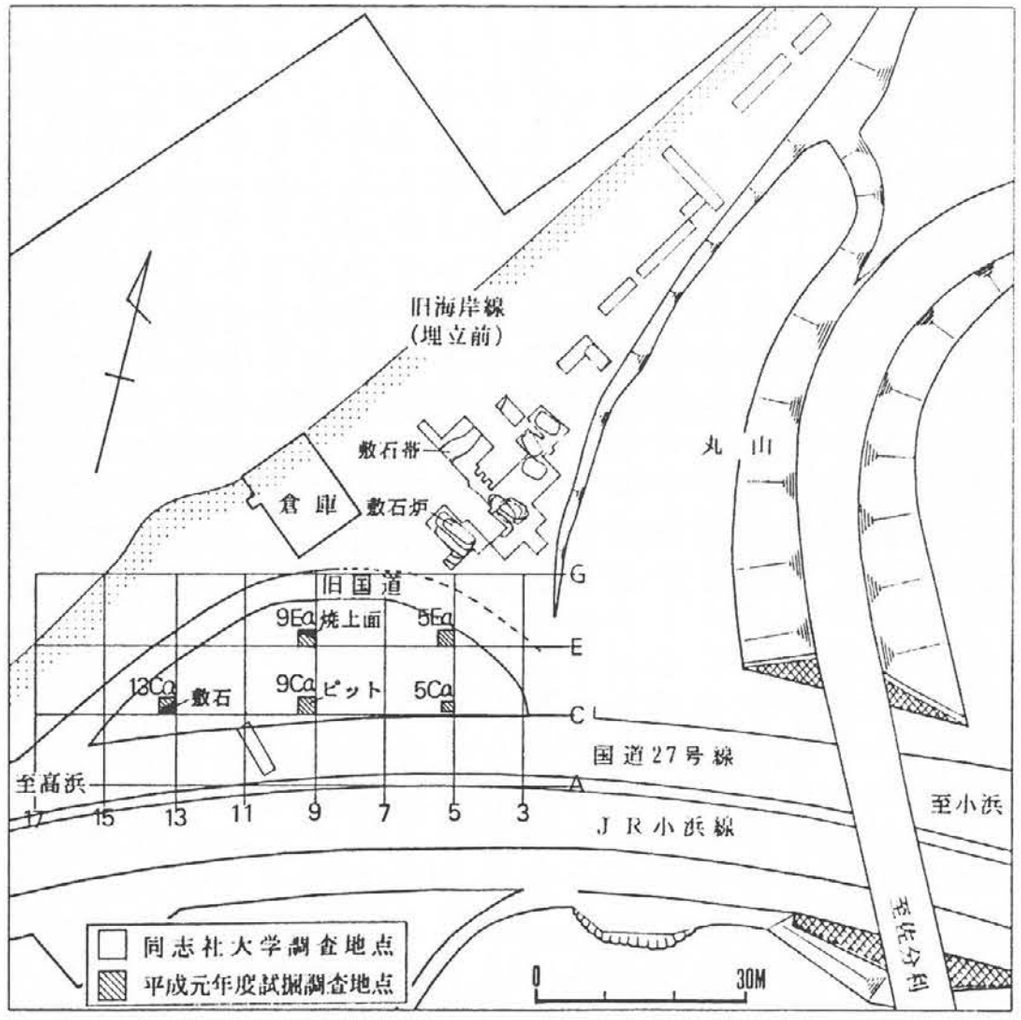
二子山３号墳の歴史





船　岡　遺　跡

所 在 地	福井県大飯郡大飯町小掘30字東船岡 他
調査原因	国道27号線付替工事に伴う事前調査
調査主体	大飯町教育委員会
調査担当	福井県立若狭歴史民俗資料館
調査期間	平成元年12月６日～平成元年12月20日
調査面積	２９㎡
時　　代	奈良時代



遺跡周辺の地形と調査地点（過去の調査地点は『若狭大飯』による）

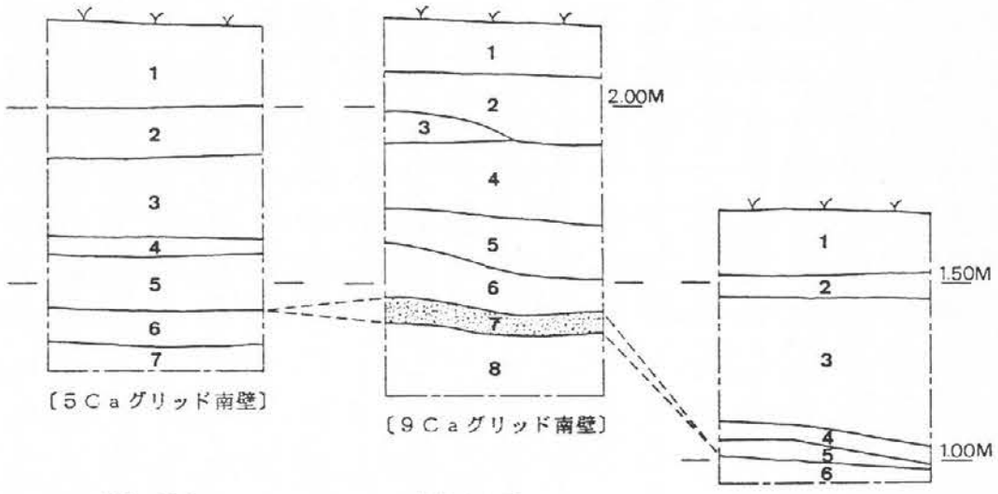
試掘調査の概要

（1）はじめに

船岡遺跡は、ＪＲ小浜線の若狭本郷駅から西へ約 500ｍの地点に位置する奈良時代の土器製塩遺跡である。この遺跡は、1960年(昭和35年)に発見され、その後直ちに同志社大学によって試掘調査が実施された。そして、翌年の1961年には、同大学によって本格的な発掘調査が行われた。

この調査において、旧国道より北側では、細片化した多量の製塩土器と共に扁平な自然石を密に敷き並べた長方形の炉跡群や、海岸線とほぼ平行に敷かれた護岸用列石とも考えられる敷石帯などの遺構が検出された。一方、旧国道より南側では、試掘調査時のトレンチや掘削された国道27号線の北側側溝の西半部分でピットや焼土層が確認された。

今回、国道27号線と旧国道とに挟まれた半月状の畑地となっている部分に国道が通ることになった。そのため、旧国道北側で確認された敷石炉群などの遺構や遺物包含層の南への広がり、その他遺構の存否を確認することなどを目的として試掘調査を実施した。今回の調査では、５ケ所に発掘区を設定した。



〔５Ｃａグリッド南壁〕

〔９Ｃａグリッド南壁〕

〔１３Ｃａグリッド南壁〕

１ 暗褐色土層
２ 淡黄褐色混礫土層
３ 黄褐色粘質土層
４ 砂層
５ 淡灰褐色粘質土層
６ 淡黄灰色粘質土層
７ 淡灰色粘質土層

１ 茶褐色土層
２ 淡灰褐色混礫土層
３ 黄褐色粘質土層
４ 灰茶褐色土層
５ 淡灰茶褐色粘質土層
６ 茶褐色土層
７ 黒褐色土層(包含層)
８ 砂礫層

１ 淡灰褐色土層
２ 淡黄灰色粘質土層
３ 暗褐色土層
４ 砂礫層
５ 砂層
６ 砂礫層

各グリッドの層位

（2）層　位

調査の対象となった半月状の畑地となっている部分は、全域にわたりかなり埋め立てられている。５Ｃａグリッドの５層、９Ｃａグリッドの６層、13Ｃａグリッドの３層は、埋め立て以前の耕作土と考えられ、畑地の東側では70㎝、西側でも40㎝は土が入れられている。

旧耕作土下は、５Ｃａ、５Ｅａグリッドでは淡灰色の粘質土となり、５Ｃａグリッドの黄色土を含む６層からは、数点製塩土器が出土している。

９Ｅａ、13Ｃａグリッドでは、旧耕作土下は砂礫層となり、この砂礫層の上面に遺構が築かれている。このうち、13Ｃａグリッドの敷石遺構の上には、砂層(５層)や砂礫層(４層)がかぶさるように堆積しているのがみられた。

９Ｃａグリッドでは、砂礫層(８層)と旧耕作土との間に５～７㎝の厚さで黒褐色土(７層)が堆積している。この層からは、多くの製塩土器が出土している。

（3）遺　構

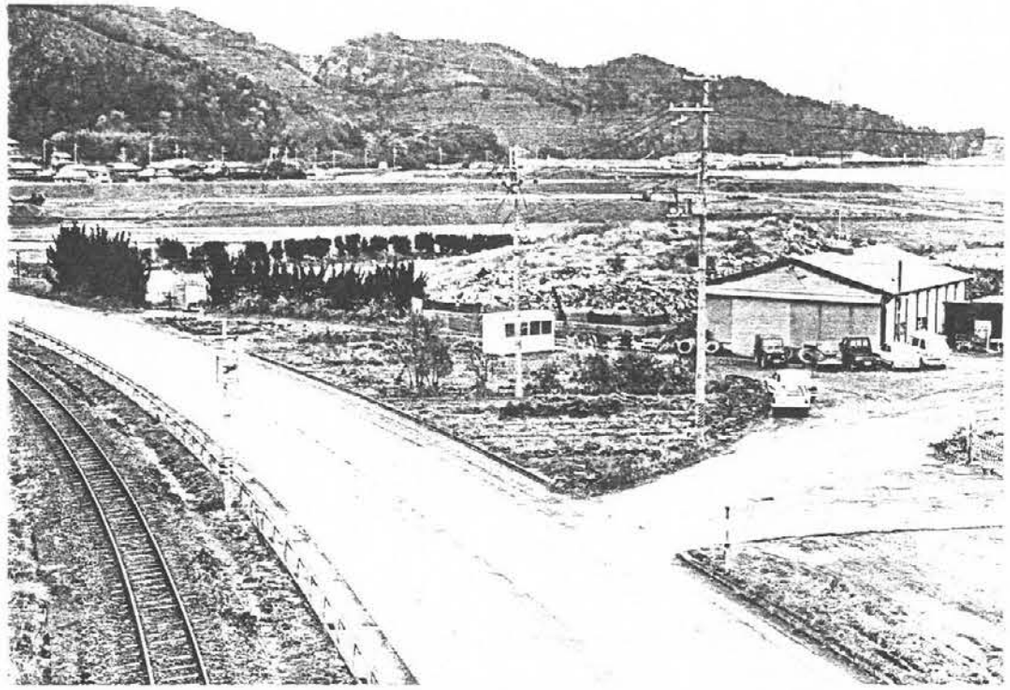
今回の調査では、炉跡は確認できなかったが、９Ｃａ、９Ｅａ、13Ｃａグリッドで敷石遺構、焼土面、ピットを検出した。９Ｃａグリッドでは、砂礫層の上面でピット４個を検出した。このうち、３個は近接して掘られていた。いずれのピットも黒褐色土と共に製塩土器が詰まっており、上面を覆っている包含層と同質であり、掘り込まれた位置は明確にできなかった。

９Ｅａグリッドでは、砂礫層上面で固くしまった面とピット１個を検出した。固くしまった面は、グリッドの北側３分の１の範囲でみられ、部分的に赤く変色しているのが確認できた。

13Ｃａグリッドでは、グリッドの南西隅と北東隅とを結ぶ線より南東側に赤く焼けて脆くなった拳大の石がまばらに敷かれていた。この敷石遺構は、旧海岸線に向かってわずかに傾斜しており、縁辺部は旧海岸線と平行になっている。敷石の状態や海岸線との関係から、旧国道北側で確認された敷石帯と同じ性格の遺構と考えられる。

（4）遺　物

９Ｃａグリッド７層の黒褐色土層以外にも、13Ｃａグリッドの敷石の間や旧耕作土などから製塩土器が出土した。製塩土器は器壁が厚く、外面には粘土のつなぎ目や指の圧痕が残っており、船岡式製塩土器である。また、製塩土器の他に土師器も出土したが、小破片数点である。



試掘調査地近景（東より）

１３Ｃａグリッド 敷石遺構検出状況（北より）